

# 赤ちゃんの四季(25)

本音ばかりでは  
世が荒む



中村 肇氏

教育基本法案が上程されるや否やあつという間に成立してしまった。今の教育の抱える問題は、教育基本法の生い立ちやその内容にあるのではなく、改定したところで解決するわけがない。ゆとり教育の弊害としての学力低下が取沙汰されているが、知識伝授だけなら、ITを活用した教材で十分であり、学校教育の必要性はない。

こどもの教育で大切なことは、知識の伝授だけでなく、豊かな心を育むことである。学校での教師との出会い、友人との出会いが子どもたちの社会性を養い、文学や芸術、とくに古典に触れることにより、子どもたちに豊かな感性が育まれていく。

藤原正彦氏は、その著『国家の品格』の中で、日本人のこころは「精神性を尊ぶ風土」、役に立たないことをも尊ぶ風土にあると述べている。文学、芸術、宗教など、直接役に立たないことを重んじ、金銭や世俗的なものを低く見る風土こそが、世界に誇れる日本人の心であり、世界中から尊敬の念を集めている由縁であるという。昨今の日本の為政者は、米国流の経済至上主義、競争社会の道を選択し、教育、医療にも市場原理を持ち

込んできた。これまでの政治家は本音と建前を上手に使い分けて世を治めてきたが、昨今の政治家の言動を見ていると、本音で話し、突っ込まれると何が悪いかと開き直る。一見明快でマスコミ受けするが、内容は軽薄で、極めて短絡的である。戦後派として建前よりもかなり本音で生きてきた私だが、あれほどまでに建前を無視することはできない。

世の中「本音」ばかりが横行すると、人間関係は刺々しい、殺伐とした社会となる。「建前」があるからこそ、人間として奥行きができ、伝統、文化が伝承されていくのである。文化とは、直接実生活に欠かせないものではないが、無視して生きることができない生活習慣であり、それは建前そのものである。

教育は先人が築き上げてきた文化、建前の部分を伝授することにある。情報垂れ流しの現代社会では、建前抜きでみせる大人の本音が、被うことなく子どもたちの目に飛び込んでくる。建前が失われた社会では、子どもたちから夢を奪い、品性のある大人に育たなくなってしまう。

(なかむらはじめ氏…兵庫県立こども病院長、神戸大学名誉教授)